OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第43号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

11連覇を達成し11回胴上げされる楠本繁生監督

いばら 茨の道越え 11連覇!!

ハンドボール部女子

全日本学生ハンドボール選手権大会

高松宮記念杯回女子60回全日本学生ハンドボール選手権大会が11月、広島県立総合体育館などで開催された。ハンドボール部女子は決勝で筑波大学を36―30で降し、史上最長記録を更新する11大会連続12回目の優勝を果たした。

ハンドボール部女子は、全日本インカレで楠本繁生監督が就任した2010年に準優勝、11年に初優勝。13年から連覇を継続し、2018年に男女を通じた最長連覇新記録となる6連覇を達成。以後、記録を更新し続けている。

インカレは1回戦で札幌国際大学を50―2、2回戦で福岡大学を32―20、準々決勝で日本体育大学を45―21で降した。

東海大学との準決勝は課題だった立ち上がりで出足のいい展開になり、尾関栞（体育3年・昭和学院）、石川空（体育4年・大分鶴崎）らが得点を重ね、35―20と大差をつけた。

決勝は前回に続いて筑波大学と対戦。序盤は相手エースの強烈なシュートに苦しみ、前半16分では9―10。しかし12―12の24分から奥山紗彩（体育3年・四天王寺）、石川、小林実杜（同）が3連続ゴールを決めて前半を17―14で折り返す。後半も開始1分から濵口まお（体育4年・四天王寺）、石川、福井すみれ（同・名古屋経済大学市邨）が3連続ゴールを決めて突き放し、36―30で勝利。楠本監督が胴上げで11回、宙に舞い、閉会式で石川、濵口、福井とGKの比嘉楓（体育3年・那覇西）に優秀選手賞が贈られた。

部は新チーム結成後、「誰が出ても遜色のないチーム」を作ることを目標に掲げた。主将を置かず、他に頼ることなく一人ひとりがチームとして何が必要かを考え、行動に起こすことをめざした。

しかし、11連覇までの道のりは順風満帆ではなかった。前年から主力だった高来葵美（体育3年・小松商業）が直前にアキレス腱断裂で戦列を離れ、関西学生春季リーグ最優秀選手のGK・中村理乃（体育4年・高津）も右ひざを負傷した。さらに、日本代表でチームの精神的支柱の石川も大会直前、練習中に右手中指を骨折して手術。利き手の左手でなかったのが救いだったが、患部を固定して試合に臨んだ。

楠本監督は「大学生にとって、インカレは1年で1回、一生に一回だけの経験にもなるので、そこに出場できるチャンスがあること、試合ができることに感謝してほしいと毎年思っている」と話す。1年1年苦しみ、全力を尽くしてつないだ連覇は、新チームに託された。

絶対女王

石川空（体育4年・大分鶴崎）

福井すみれ（体育4年・名古屋経済大学市邨）

濵口まお（体育4年・四天王寺）

比嘉楓（体育3年・那覇西）

ハンドボール部 女子

先輩から試練 決勝進出逃す

日本ハンドボール選手権大会

日本ハンドボール選手権大会（女子の部）が12月、福井県あわら市で開催され、本学は準決勝でブルーサクヤ鹿児島（ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング）に28―31（前半15―12）で敗れ、４年ぶり３回目となる決勝進出を逃し、悲願の初優勝は果たせなかった。

坂下碧（体育３年・高岡向陵）

吉野珊瑛（体育４年・名古屋経済大学市邨）

川﨑美羽（スポーツ科学１年・佼成学園女子）

奥山紗彩（体育３年・四天王寺）

女子 本学は水海道第二高校、HC名古屋を降し、準々決勝は熊本ビューストピンディーズを23―21で振り切った。

準決勝では、前半はエースの石川空（体育４年・大分鶴崎）だけでなく、左サイドから福井すみれ（体育４年・名古屋経済大学市邨）が、右サイドから吉野珊瑛（同）が再三、シュートを決め、GK比嘉楓（体育３年・那覇西）が２度の７㍍スローなどで好ブロックを連発。３点リードの15―12で前半を折り返した。

しかし、後半、疲労から足が止まる。21―18の12分からオフェンスミスが相次ぎ、３連続失点で同点。流れを変えようとタイムアウトを取ったが、さらに２連続失点。ようやく吉野がシュートを決めたが、また３連続失点。あっという間に大差がついた。

実業団のコンタクトの激しさは、大学とは段違いだ。前日の準々決勝では、濵口まお（体育４年・四天王寺）らが何度も相手ディフェンスに阻まれてひっくり返され、床に体を打ちつけた。楠本監督はハーフタイムで「足で守らないと、３点差なんてすぐ追いつかれる。ここは気力の勝負や」と選手を送り出したが、体力の消耗度はインカレの比ではなかった。

鹿児島はメンバー16人中５人が本学の卒業生だ。試合前、楠本監督は「大谷翔平さんではないが、相手に憧れたり先輩と思ったりすると、気持ちで負ける。先輩ではなくソニーと戦うんだ」と選手を送り出したが、卒業生の笠井千香子選手に５得点、服部沙紀選手に４得点を許した。

石川は「卒業生の方に自分たちの弱いところを突かれた」と涙が止まらなかった。初優勝を果たした香川銀行もメンバー16人のうち８人が卒業生だ。日本選手権は、先輩からさらなる精進を求められる場となった。

石川空（体育４年・大分鶴崎）

バスケットボール部 女子

インカレ２回戦敗退 巻き返し誓う

全関西大学女子バスケットボールリーグ
全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は４～５月の全関西大学女子選手権で４連覇、11月の皇后杯全日本選手権の２次ラウンドに進出したが、12年ぶり優勝を狙った全日本インカレは２回戦で敗れた。村上なおみ監督は「チャンスの年だと思っていたが、個々の決定力の差が出た」と悔やむ。

１年生からPGとしてチームの軸を務めてきた日高ひかる（体育４年・精華女子）が最上級生になり、2023年の第１回新人インカレで優勝した三次真歩（体育２年・広島皆実）が成長してきた。この１年間、今季のインカレ決勝に進んだ両大学に勝つためのレベルの練習に徹した。

９～11月の全関西大学女子リーグは１次リーグで６勝３敗、２次リーグは１勝２敗で３位だった。

インカレは１回戦で環太平洋大学を81―55で降し、２回戦で早稲田大学と対戦した。第１クオーターで14―22と劣勢に立つ。アイエビドゥン・グレイス（体育２年・倉敷翠松）の奮闘で第３クオーター終了では46―47と１点差に迫ったが、突き放され、58―72で敗れた。

来季は、大黒柱でトヨタ紡織に進む日高が抜けるが、タレントは豊富だ。早大戦で20得点のグレイス、攻撃力の高い三次に加え、大型新人の大上粋奈（スポーツ科学１年・広島皆実）、長身180㌢の泉都（体育２年・奈良文化）も得点力がある。

村上監督は「オフェンスもディフェンスももっと攻撃的にならないと勝てないことが改めて分かった。少しの甘さ、ミスが勝敗を分ける。その厳しさを年間通して練習で求め続けていきたい」と巻き返しを誓った。

アイエビドゥン・グレイス（体育２年・倉敷翠松）

大上粋奈（スポーツ科学１年・広島皆実）

三次真歩（体育２年・広島皆実）

日高ひかる（体育４年・精華女子）

バスケットボール部 男子

無念の２部降格 「必ず１年で戻る」

バスケットボール部男子は、９～11月の関西学生リーグ（１部）を４勝10敗で終えて11位となり、入れ替え戦の流通科学大学戦で痛恨の２敗。２部降格となった。

リーグ戦序盤に、昨年度からの主力選手に怪我が相次ぎ、その穴を埋めるため控え選手や１年生が奮起したが、リーグ戦を通しての悪い流れを断ち切れず悔しい結果であった。

初戦の同志社大学戦は序盤からリードされ、56―105で黒星スタートとなった。第２戦の関西学院大学戦で75―71と初勝利を挙げたが、第３戦の近畿大学戦で50―88、第４戦の立命館大学戦でも接戦の末82―88と連敗。第５戦の関西大学戦、続く大阪経済大学戦で連勝したが、第７戦の神戸医療未来大学戦、続く大阪産業大学戦で連敗。第９戦の天理大学戦は75―63で勝利したが、第10戦以降は連敗。

４勝７敗で１部リーグは10位となった。

続いて４チームによる下位リーグで３敗し、最終11位でリーグを終えた。

入れ替え戦では、新人インカレで関西代表となり勢いのある流通科学大学と対戦。連敗続きの中チームの立て直しができず２敗し、10年ぶりに２部降格となった。

来季に向けて比嘉靖監督は「１年で必ず１部に復帰するという強い気持ちを持って、日々の練習やトレーニングすることが大切。また日頃の学校生活においても、真摯に取り組めるかが大事になってくると思う」と巻き返しを誓った。

山田大智（体育３年・初芝橋本）

南口皐（体育４年・大阪）

関西学生バスケットボールリーグ

鈴木太歳（体育４年・城東）
佐野悠星（体育４年・育英）

Bチーム交流戦フレンドリーマッチ開催

バスケットボール部女子交流戦「フレンドリーマッチ2024 大阪体育大学×武庫川女子大学」が11月、本学で開催された。

フレンドリーマッチは、普段公式戦のベンチに入れないBチームの出場の場。インカレに出場できないBチームの４年生にとっては、引退試合となる。2017年、以前から親交のあった両大学間で始まり、コロナ禍の中断をはさんで、毎年、交互に両大学で開催されている。本学では３回目の開催となった。

また、運営を担う学生スタッフの演出で、試合後に両チームの４年生全員に両親らが手紙を渡すサプライズがあり、４年生が号泣するなど感動的なイベントとなった。

本学スポーツマネジメントコース専攻の学生十数人が中心となり、企画・運営を担うことも大きな特徴だ。学生スタッフは全クラブの統括部局であるスポーツ局の助言を受けながら、毎週会議を重ねた。販売促進のアイデアを考え、ハーフタイムでのイベント内容やチケット・ポスターのデザイン・印刷、プロモーションビデオの制作、前売り券販売、当日の運営などにあたった。Aチームの選手たちも運営を手伝った。当日は学生スタッフが大学公式ユーチューブでライブ中継を実施した。

硬式野球部 男子

春3位↓秋2位「来春こそV」

阪神大学野球秋季リーグ

硬式野球部男子は2024年、阪神大学リーグで春3位、秋2位だった。

春以降、投手陣は絶対的なエースはいないが、秋は総合力での底上げをめざした。先発は、変化球と速球のコンビネーションで安定感がある左腕の林勝宏（体育3年・駒澤大学附属苫小牧）、140キロ中盤の球威とフォーク、スライダーが武器の高田純誠（体育2年・報徳学園）が先発を、4年生トリオ（いずれも体育学部）の加藤祥太（広島国際学院）、久保伊織（須磨翔風）、碓永高巳（明石南）が中継ぎ、抑えを務めた。秋の防御率は春の3・28から2・73まで向上した。

野手は4年生4人が就職活動のために引退し、その穴をDHの山本樹紀（体育3年・星林）、二塁の小畑虎之介（スポーツ科学1年・智辯学園和歌山）が台頭して埋めた。チーム打率は春の2割3分から2割7分1厘にアップした。

リーグ戦は開幕戦の関西国際大学戦で山本が5打数5安打と爆発し、第1節を連勝。3戦目の大阪産業大学戦は九回に3点差を追いついて価値ある引き分けとし、4戦目も勝利。好調なスタートを切った。

4勝1敗1分けで臨んだ10月9日の天理大学戦。天理大学は春に7連覇を達成して大体大の持つ記録に並び、秋も6連勝中だった。大体大は四回から小刻みな継投に出たが、七回まで0−5と離された。八回に齋藤智也（体育3年・玉野光南）、平林直（同・市立和歌山）の連続適時打で2点差に迫ったが、その裏、2ランを浴びた。この試合でリーグの帰すうが決まり、天理大学は8連覇を達成した。

2025年は2月24日から宮崎県日南市南郷で、西武ライオンズと入れ替わるかたちでキャンプを張る。松平一彦監督は「防御率は1点台に、得点力も挙げ、優勝をめざす」と2019年春以来6年ぶりのV奪回を誓っている。

山本樹紀（体育3年・星林）

弓禁祥太郎（体育4年・履正社）

齋藤智也（体育3年・玉野光南）

平子真弘（体育3年・日本航空石川）

林勝宏（体育3年・駒澤大学附属苫小牧）

硬式野球部 女子

無念のインカレ8強 初めて全日本逃す

全日本女子硬式野球選手権大会

硬式野球部女子は8月の全日本インカレでは準々決勝で敗退。創部15年で初めて全日本選手権出場を逃した。

今季は関西女子選手権ラッキートーナメントの準決勝で阪神タイガースWomenに9−8で打ち勝って11年ぶりに優勝するなど前半戦は好調だったが、全日本インカレでは打線が湿った。

予選リーグは相手のミスで何とか点を取る試合が目立ち、1勝2分け。日本大学国際関係学部との準々決勝では、一回、相手4番に2点三塁打を浴び、二回も適時打を許す苦しい展開となった。打線は七回に3番・白石美優（体育4年・福知山成美）、4番・山本一花（体育3年・履正社）の連打などで1点を返すのがやっとで、1−3で敗れた。

誤算は、女子野球W杯（カナダ）。横井光治監督が侍ジャパンコーチとして、白石とともに8月上旬まで約3週間、チームに帯同。このためインカレ前の重要な時期に練習試合などが組めず、実戦で生きた球を見る機会が乏しかった。

このほかの主な今季の成績は、関西リーグ（ラッキーリーグ）エキスパートリーグ1部3位、全日本インカレ高知大会（5月）ベスト8だった。

横井監督は「女子野球は人気の高まりでレベルの向上が著しい。特に投手では、スピードよりも変化球の切れや制球が進歩している。いかに変化球を打つかが来季の課題」と話している。

内田陽菜（体育4年・折尾愛真）
山本一花（体育3年・履正社）
畑中ゆりあ（体育3年・花咲徳栄）
堂前凌那（教育1年・岡山学芸館）

侍・白石がW杯でMVP

W杯決勝後の白石美優と横井光治コーチ ©WBFJ

白石美優が、7〜8月にカナダで開催されたWBSC女子野球ワールドカップファイナルステージに侍ジャパン女子代表として参加。MVPと首位打者を獲得し、日本を7連覇に導いた。

白石は初戦の台湾戦は途中出場だったが、2戦目以降、先発出場した。6試合通算で16打数9安打8打点、打率5割6分3厘と侍打線をけん引。安打数は1位タイ、打点は2位、長打率（SLG）も8割1分3厘でトップと目覚ましい成績を残した。

福知山成美高校卒業後、プロチームの京都フローラ、愛知ディオーネで計3年プレーし、2021年、大阪体育大学に入学。2023年の女子野球アジアカップから侍ジャパン女子代表に選出された。白石は「初戦でスタメンから外れた時はすごく悔しかった。次戦の練習からしっかりとアピールできるように準備してきたことが結果につながった」とし、「7連覇に貢献できたという実感があり、すごく達成感を感じた」と語っている。

卒業後は、阪神タイガースWomenでプレー。関西女子選手権ラッキートーナメントなどで大体大のライバルとなる。

バレーボール部

春へ好予感の終盤4連勝 ブロック決定リーグ1位

待ってろ春！2部Vで1部復帰 広瀬、出水が個人賞

関西大学バレーボール秋季リーグ

バレーボール部男子は9〜10月の関西大学秋季リーグ2部で優勝。1部リーグへの復帰を果たした。個人賞では、広瀬逸葵（体育2年・阿南光）が優秀選手賞、出水充希（体育3年・大商学園）がベストスコアラー賞を受賞した。

男子 リーグ開幕戦の京都大学戦では3−1で白星発進。続く明治国際大学戦では3−0でストレート勝ち。第3戦の大阪大谷大学戦では1セット落としたものの3−1で勝利した。

第4戦の神戸学院大学戦では、接戦の末1−3で惜敗。第5戦の桃山学院大学戦、続く関西福祉大学戦も3−0でストレート勝ち。第7戦の大阪国際大学戦では1セット落としたものの3−1で勝利を収め、リーグ戦を6勝1敗の2位で終えた。

続いて4チームによる上位リーグに進み、桃山学院大学戦、神戸学院大学戦では3−0で快勝した。最終戦の大阪国際大学戦では、第1セット先取したあと、第2・3セットを相手チームに取られ苦しい状況が続いたが、出水をオポジットにし、レシーブ技術の高い松本翔吾（体育2年・玉野光南）を入れて流れを変え、第4セットを取り、第5セットはデュースが続く中、最後まで粘りを見せ22−20で勝利。1シーズンで1部復帰を果たした。

沼田薫樹監督は「主力選手が活躍する裏で、マネージャーの小松芽菜（教育1年・岡豊）がインスタで情報発信し、内と外を繋ぐようにチームを影で支えていたことも大きかった」と振り返る。

来季に向けて沼田監督は「『チーム一体となって戦い応援されるチーム』というコンセプトを大切にしながら、1部リーグ6位以上をめざす」と意気込みを語った。

出水充希（体育3年・大商学園）

広瀬逸葵（体育2年・阿南光）

阿部興太郎（体育2年・大塚）

税所光（体育3年・石川県立工業）

関西大学バレーボール秋季リーグ

バレーボール部女子は9〜10月の関西大学秋季リーグ1部を4勝7敗の8位で終えた。チーム技術ランキングでは、ブロック決定本数で1位、バックアタック決定率で1位タイ。個人技術ランキングでは、ブロック決定本数で黒木陽奈（体育2年・都城商業）が1位、サーブレシーブ成功率で徳永優奈（体育3年・誠修）が3位にランクインした。

女子 秋季リーグは、開幕戦の帝塚山大学戦では、1−3で敗北した。続く関西大学戦はフルセットの末2−3で惜敗。その後も3連敗したが、接戦で惜しい試合が多かった。

リーグ戦半ばからリベロの山川かりん（体育4年・鳥取城北）がスパイカーへコンバートされて活躍。主将の増田結子（体育4年・北嵯峨）がスパイカーからリベロになり、いったんコートの外にでる時間もあることにより全体を見渡せ、いいゲームメイクができた。リーグ後半は、第6戦の大阪国際大学戦では3−1、続く京都橘大学戦、関西福祉大学戦、園田学園女子大学戦も勝利し、4連勝。リーグ戦を8位で終えた。長江晃生監督は「春よりもチーム全体のレベルが上がっている。安定して力を発揮することができ、順位が上がったという結果につながった」と振り返った。

11月の全日本大学女子選手権大会では、1回戦で関東の上位チームの順天堂大学に0−3で敗れ、1回戦敗退となったが、第2セットで23−25と惜しい場面もあった。

長江監督は「セッターの木下碧海（スポーツ1年・純心女子）、黒木、徳永のほか新戦力がどれだけ出てくるか楽しみだ」と来季に向けて期待を寄せた。

徳永優奈（体育3年・誠修）

山川かりん（体育4年・鳥取城北）

山本千尋（体育4年・誠英）

増田結子（体育4年・北嵯峨）

黒木陽奈（体育2年・都城商業）

陸上競技部

短・中長距離・投擲・跳躍・混成 幅広くメダル・入賞ラッシュ

関西学生陸上競技種目別選手権大会兼関西学生混成選手権大会

陸上競技部は、10月に大阪市のヤンマーフィールド長居で開催された関西学生陸上競技種目別選手権大会兼関西学生混成選手権大会で、4種目で優勝したほか、4種目で2位、5種目で3位に入った。

短距離ブロックでは、絶好調の萩尾脩人（体育4年・門真なみはや）が男子100㍍で、10秒33で2連覇を達成した。

中長距離ブロックでは、女子3000㍍障害物で大久保楓香（体育2年・草津東）が11分30秒64で3位に入った。

層の厚さを誇る投擲ブロックでは、女子ハンマー投げで9月の日本インカレで6位に入った川島空（体育2年・大阪体育大学浪商）が56㍍62で優勝した。

女子砲丸投げでは中原鈴（体育2年・東大阪大学敬愛）が13㍍83で優勝。中原は女子円盤投げでも40㍍39で2位に入った。

男子砲丸投げでは黒田翔貴（大学院博士前期課程1年）が15㍍10で2位、濱田茉裕（教育2年・松阪商業）が14㍍50で3位、女子砲丸投げでは武田光里（体育2年・添上）が12㍍20で3位に入った。

また、男子やり投げでは、鈴木陸人（体育3年・帯広農業）が67㍍24で3位に入った。

跳躍・混成ブロックでは、表彰台常連の和田真琉（大学院博士前期課程2年）が女子七種競技で、4786点で優勝。和田は女子走り高跳びでも1㍍65で2位に入った。

また、男子十種競技で三和龍之介（体育2年・社）が6833点で2位。男子棒高跳びで山本湧斗（体育2年・明石商業）が5㍍00で3位に入った。

女子砲丸投げ1位・中原鈴

女子3000㍍障害物3位・大久保楓香

女子ハンマー投げ1位・川島空

女子砲丸投げ3位・武田光里

男子100㍍1位・萩尾脩人

七種競技1位・女子走り高跳び2位・和田真琉

【来シーズン展望】

短距離ブロック・貴嶋孝太監督

「チームでは上位の競技会での入賞、個人では男子400㍍の岩﨑拓生（体育3年・大阪）がワールドユニバーシティゲームズの日本代表入りをめざす」

中長距離ブロック・友金明香監督

「長距離は5000㍍、中距離は3000㍍の記録を作り、関西の学生駅伝での順位をあげたい」

投擲ブロック・中西啄真監督

「今シーズンは特に2、3年生を中心に関西や全国の舞台での活躍が見られた。新たな戦力を加え、来シーズンはさらなる活躍を期待したい」

髙本恵美部長（跳躍ブロック監督）

「全国、国際大会を見据え、5月の関西インカレで確実に結果を残し、総合順位を一つでもあげたい」

水上競技部

男子総合2位にステップアップ 女子山村、早﨑、枡井表彰台

関西学生選手権水泳競技大会

8月に京都市の京都アクアリーナで開催された関西学生選手権水泳競技大会で、水上競技部男子は4種目で2位、3種目で3位に入り、総合順位は2位と、昨年より順位を1つ上げた。

男子

好調が続く友田和志（体育4年・関西大学北陽）が200㍍バタフライで1分59秒90、100㍍バタフライでは53秒45でそれぞれ2位に入った。

表彰台常連の辻本瑞樹（体育4年・桃山学院）は、200㍍背泳ぎで2分03秒98で2位、100㍍背泳ぎでは57秒87で3位に入った。

このほか、200㍍バタフライで木倉颯太（体育4年・富山国際大学付属）が2分00秒40で3位に入った。

リレーでは、400㍍メドレーリレーで辻本、関悠弥（体育2年・高岡第一）、友田、田中拓紀（体育3年・盛岡北）が3分44秒83で2位。400㍍フリーリレーで大山仁大（体育4年・尾鷲）、田中、上甲陽輝（スポーツ科学1年・向陽台）、友田が3分24秒29で3位に入った。

総合順位は2位と、昨年より順位を1つ上げたが、9月の日本学生選手権では予選突破を果たせなかった。

川島康弘部長は「友田、木倉が競い合ってタイムを上げ、チームを引っ張った」と今シーズンを振り返る。

新チームについて、川島部長は、田中、関、中川凌太（体育2年・桃山学院）を「記録が上がってきて、調子が良い選手」と評価したほか、上甲、井上輝星（体育2年・福井工業大学附属福井）も「リレーの主力になる選手で、順調に伸びている」として、期待を寄せた。

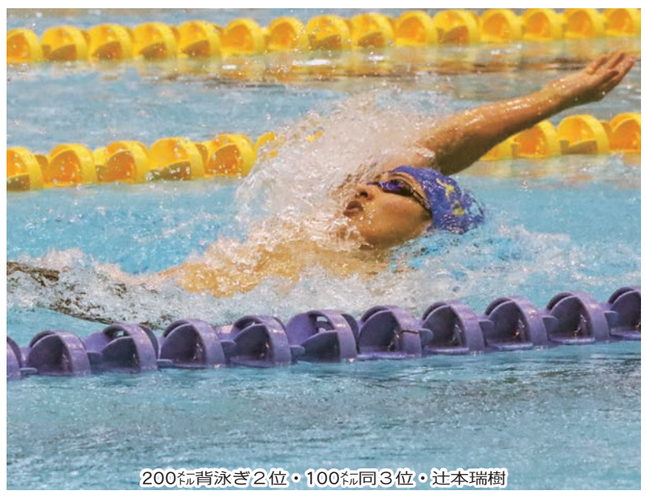
女子

一方の女子は、8月の関西学生選手権で、1種目で2位、2種目で3位に入ったが、総合順位は5位と、昨年より順位を2つ下げ、9月の日本学生選手権でも予選突破を果たせなかった。

フリーを強化し、調子をあげた山村莉子（体育4年・大阪信愛学院）が200㍍個人メドレーで2分20秒25で2位。1年生ながら早﨑愛莉（スポーツ科学・鹿児島）が2分22秒03で3位に入った。

表彰台常連の枡井萌（体育4年・広島なぎさ）は400㍍個人メドレーで4分57秒15で3位に入った。

川島部長は1年生の早﨑、吉本早希（スポーツ科学・笠田）を「順調に伸びていて、今後の活躍が楽しみ」と評価した上で、新チームについても「熱心に競技に取り組み、結果を出せるようになると、より一層力が入ると思う。来シーズンに期待したい」とエールを送った。


200㍍背泳ぎ2位・100㍍同3位・辻本瑞樹

100㍍・200㍍バタフライ各2位・友田和志

200㍍個人メドレー3位・早﨑愛莉

200㍍個人メドレー2位・山村莉子

400㍍個人メドレー3位・枡井萌

400㍍メドレーリレー2位

体操競技部 団体6位に躍進 田部、つり輪で学生王者

全日本学生体操競技選手権大会

体操競技部男子は8月の全日本インカレで田部壮一郎（体育4年・清風）が種目別つり輪で優勝、築山翔馬（体育3年・相生学院）がゆかで準優勝、11月の全日本種目別選手権で田部がつり輪、築山がゆかでそれぞれ7位入賞。インカレ団体でも昨年の9位から6位にステップアップした。

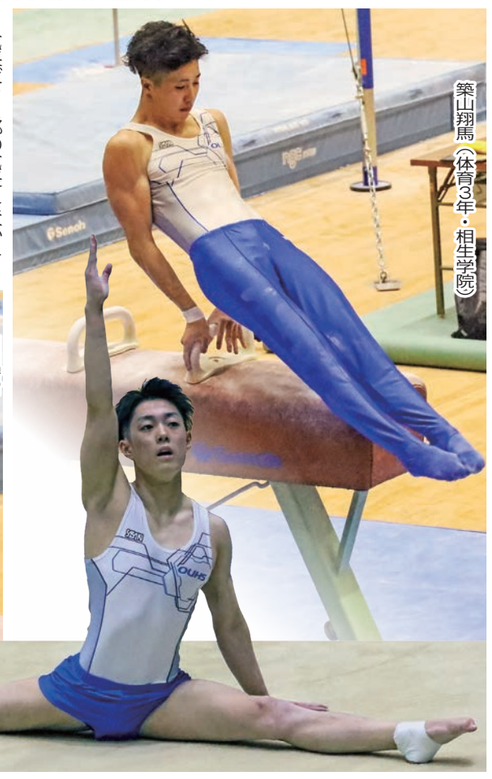
田部壮一郎（体育4年・清風）

男子 全日本インカレの個人総合は築山が4位、田部が8位。種目別は、田部のつり輪優勝のほか、築山がゆかで2位、跳馬で8位に入った。団体では、ミスが出ても他の選手が踏ん張って支え合った。チームが目標に掲げていた4位には届かず、全日本団体選手権の出場権は勝ち取れなかったが、藤原敏行監督は「6位に入り、次年度のインカレで最終班として演技する権利を得たのは大きな成果だ」と部の成長に手応えを感じている。

田部は今季、試合前に調子を崩すことがあり、全日本インカレも大会直前は不調だったという。藤原監督は「調子が上がりきらない中で、彼なりの努力と積み重ねてきたものがあってこその粘り強さ、結果だった」と評価する。

築山は小学生のころから注目された逸材だ。高校生の時、2021年全日本体操種目別選手権のゆかで4位、大学1年の時も全日本インカレのゆかで優勝した。3年生になって後輩を引っ張る立場になり、責任感がより増したという。インカレでの成績が評価され、U21大学生強化選手に選ばれた。藤原監督は「得意のゆかは、世界で戦えるレベルを持っている。日本代表をめざしてほしい」と期待を寄せる。

チームはインカレ後新体制となり、新主将の唐澤一志（体育3年・高崎工業）は就任が決まった日、部員全員の前で「団体総合では3位になる」と宣言した。藤原監督は「非常に高い目標だが、決して不可能ではない。選手の意識を尊重しながらサポートしていきたい」と話す。


築山翔馬（体育3年・相生学院）

川口碧雪（スポーツ科学1年・大阪体育大学浪商）

吉田壮輝（体育3年・鯖江）

力ある4年生が団結 団体6位に上昇

全日本学生体操競技選手権大会

体操競技部女子は春に関西学生選手権で2年ぶり、西日本学生選手権は12年ぶりに団体総合で優勝し、8月の全日本インカレも昨年から順位を1つ上げて6位入賞。田原宏晃監督は「部にとっては昨年より好成績で、いい年になった」と手応えをつかんでいる。

南涼華（体育3年・和歌山北）

女子 今季の好調の要因は、4年生が中心となったチームワークだ。全日本インカレでは、エースの北田絢女（体育・香ヶ丘リベルテ）を始め力のある4年生が引っ張った。1年生の時アキレス腱を断裂した北川莉奈（体育・四天王寺）が本格復帰。全日本インカレでは、大野帆加（体育・姫路商業）を含めた3人が団体、個人では隈元姫楽（体育・仙台大学附属明成）、北ひなた（体育・奈良大学附属）が出場。4年生5人全員が全日本インカレに出場した。

ポイントになったのは第1種目の跳馬だ。大野が試合で初めて挑んだ伸身ユルチェンコとび1回ひねりを決めて勢いをつけた。4種目を6人で演じた合計24演技で大きなミスがあったのは2演技だけ。部の持ち味であるミスの少ない体操を達成した。

力のある4年生が引退し、来季に向けて3年生に期待がかかる。3年の加畑友里（体育・和歌山北）は11月の全日本種目別選手権の跳馬に出場した。体線の美しい演技が持ち味。主将としても部員の意見をよく聞いてまとめ、部員に慕われる存在だ。加畑は「全日本種目別はわくわくして楽しめた。主将として責任感を持って、自分が点数を取る立場になりたい」と話している。

加畑友里（体育3年・和歌山北）

横江恵（体育3年・草津東）

蔦愛美（体育3年・四天王寺）

ラグビー部 ロスタイムでの悲劇も 大改革実り変貌を証明

関西大学ラグビーリーグ入替戦

関西大学ラグビーリーグ入替戦が12月、天理親里球技場で行われ、本学（Bリーグ1位）はラストワンプレーで関西大学（Aリーグ8位）に逆転されて18―19で敗れた。2019年シーズン以来6年ぶりとなる来季のAリーグ昇格は果たせなかった。

逆転負けに崩れ落ちる選手を励ます長崎正巳監督

試合は、前半を15―0で折り返したが、後半に追い上げられ、ロスタイムで逆転のトライ、ゴールを許した。

ラグビー部は「ヘラクレス軍団」の愛称で、2006年には全国大学選手権で4強に進んだが、2019年、Aリーグで最下位となり、入替戦で敗れ、2020年からBリーグにとどまっている。

2024年2月、長崎正巳GMが監督を兼任し、「大改革」に乗り出した。学修面・生活面も見直しをはかり、練習は質・量とも2倍に。徹底した走り込みなどでフィジカルを強化。新たにFWコーチを招き、ブレイクダウン（密集、接点）での強度アップに努めた。

その成果で入替戦では密集で優位に立ち、入替戦での3年連続の大敗とはまったく違う、見る者を感動させる熱戦を演じた。

堀田凌永主将（体育4年・京都成章）は記者会見で、声を詰まらせながらも「Aリーグ校相手に勝ちを知らないチームが、ここまでやったことを誇りに思う。来年はこの景色を知っている1、2、3年生と新入生が必ずやり返してくれる」と胸を張った。

シオネ・マウ（体育4年・高知中央）が先制トライ

小野田武流（体育2年・常翔学園）

中山大吾（体育3年・石見智翠館）

主将の奮起で1部残留

関西大学対抗テニスリーグ

男子 テニス部男子は10年ぶりに1部復帰した9月の関西大学対抗リーグで5戦全敗。しかし入替戦で右ひざを負傷した主将の串阪達哉（体育学部4年・慶風）らが踏ん張り、1部残留を決めた。

立命館大学との入替戦は、まず、ダブルス3試合が一斉に行われ、3組とも第1セットを落としたが、そこから第2セットで2組が取り返した。

串阪はひざをかばいながらのプレーだったが、垣内勇星（体育学部3年・西京）と組んだダブルスで第2、第3セットを取り逆転勝ち。片山稜太（体育学部3年・岡山理科大学附属）・成松孝彦（体育学部3年・松山西）組も逆転勝ち。ダブルスを2勝1敗として優勢に立ち、シングルスも3選手が勝って5―1で1部残留を決めた。

8月の全日本学生選手権大会では、エースの北昇馬（体育学部4年・駿台甲府）がシングルスの予選で2勝して本戦に進み、1勝した。

来季に向け、北、串阪の2本柱が抜ける。11月の関西学生地域トーナメントシングルスベスト4で粘り強さが武器の片山、ベスト8の平山凜太郎（体育2年・鹿児島実業）、成松らの奮起が必要だ。

宮地監督は「リーグ戦で体力がどれだけ重要か痛感した。今年以上の負荷をかけないと戦えない」。来季のインカレ、リーグ戦での熾烈な戦いに向けて体力強化が重要なテーマとなる。

寺崎呼人主将（体育3年・城南）

硬式テニス部 2部全勝、来季こそ1部へ

全日本学生テニス選手権大会 関西大学対抗テニスリーグ

女子 テニス部女子は全日本インカレでシングルス3回戦の岡村凜那（スポーツ科学1年・鳳凰）を始め本戦・予選に5人が出場。関西大学対抗リーグでは2部で5戦全勝としたが、入替戦で園田学園女子大学に1―3で屈した。

岡村は、強烈なサーブと攻撃的なストロークは全国でもトップクラス。3回戦は、試合巧者でシングルス優勝を果たした関西大学選手に4―6、3―6で敗れたが、同選手と戦った選手のうち、もっとも多くのゲームを取った。

また、インカレでは本戦で海津美空（体育4年・四日市商業）が1勝した。

9月の関西大学対抗リーグ2部は5戦全勝。シングルス・ダブルスの全25試合で24勝1敗と他を圧倒したが、園田学園女子大学との入替戦は、1部伝統校の粘り、気迫に屈した。

近年、上げ潮ムードのテニス部女子。背景には、有力な選手の加入がある。岡村修平監督によると、スポーツ科学センターによる各部へのサポート、監督が教員で長時間の手厚い指導が可能であること、スポーツ科学に関する豊富なカリキュラムなど体育大学としての強みが徐々に高校の有力校に伝わっていることが大きいという。

岡村監督は「インカレの5人出場、リーグ戦での全勝などある程度テーマは達成できた。来季は『自立した選手になる』を掲げ、1部をめざす」と意気込んでいる。

吉井ひかり主将（教育3年・水橋）

関西4強 新チームは若木杯V

関西学生剣道優勝大会／全日本学生剣道優勝大会

剣道部男子は、9月の関西学生優勝大会で4強に進出。10月の全日本学生優勝大会では、2回戦で惜しくも敗退した。

伊東凜太郎（体育4年・明豊）

新垣光司（体育4年・奈良大学附属）

男子 関西学生優勝大会は初戦シードで2回戦から出場し、花園大学に4―1で勝利。続く芦屋大学戦も2―1で勝利した。準々決勝では佛教大学に5―1で勝利して4強に進出したものの、準決勝で近畿大学に3―4で惜敗した。

10月の全日本学生大会では、1回戦で高知大学に4―1で勝利。2回戦では法政大学に1―1となり、代表者戦にもつれ込むも敗れた。

村上雷多監督は、「実力を全て出し切れず、惜しい戦いになったが、関西大会の反省を活かし、来シーズンにつながる良い戦いができたという印象」と振り返り、男子主将の伊東凜太郎（体育4年・明豊）、新垣光司（体育4年・奈良大学附属）を「思い切った試合をしてくれた」と評価した。

一方、3年生以下の新チームで挑んだ11月の若木杯関西学生大会では、1回戦で芦屋大学に不戦勝し、2回戦では同志社大学に2―2となるも本数差で勝利。3回戦では関西大学を5―1で降した。準決勝では龍谷大学に5―1、決勝では近畿大学に3―1で勝利し、優勝した。

村上監督は「今シーズンの締めくくりの大会で優勝できたことは、学生にとってもいい経験になったと思う」と話した。

来シーズンに向け、村上監督は「一回りも二回りも成長するため、選手たちがそれぞれやるべきことを理解し、一体となって稽古に取り組んでほしい」と叱咤激励した。

佐々木俊（体育2年・福岡第一）

奥村龍也（体育3年・敦賀）

剣道部 手応えの全日本2勝 関西大会は山下が奮起

関西女子学生剣道優勝大会／全日本女子学生剣道優勝大会

剣道部女子は、9月の関西女子学生優勝大会で8強に進出。11月の全日本女子学生優勝大会では、3回戦で敗退した。

山下美羽（体育4年・広島皆実）

女子 関西女子学生優勝大会は初戦シードで2回戦から出場し、京都産業大学に2―0で勝利。続く龍谷大学戦も2―0で勝利し、8強に進出した。準々決勝では大阪経済大学に1―1となり、代表者戦にもつれ込むも敗れた。

古川智司監督は「全国大会にはつながったが、チーム力を発揮しきれなかった」と振り返った上で、山下美羽（体育4年・広島皆実）を「チームの要として踏ん張ってくれ、勝ち上がることができた」と評価した。

11月の全日本女子学生優勝大会では、1回戦で志學館大学に2―2となり、代表者戦で勝利。2回戦では福井工業大学に2―2となるも本数差で勝利した。3回戦では法政大学に0―3で敗れた。

古川監督は「全国大会に向け稽古を重ね、チーム力があがってきたタイミングで大会に臨めた。1、2回戦と競り勝つことができ、チームとして良い勝ち方ができたと思う」とし、「どんな戦い方をすれば、強豪校相手にも良い勝負に持ち込めるのかを考える機会になった。来シーズンの課題が見えた大会だった」と話した。

また、3年生以下の新チームで挑んだ11月の若木杯関西学生大会では、1回戦で立命館大学に1―3で敗れた。

来シーズンに向け、古川監督は「ハングリー精神を持って稽古を重ね、結果を出せるよう、最初からスパートをかけていきたい」と抱負を述べ、新チームに期待を寄せた。

井上七海（体育3年・履正社）

水野杏菜（体育2年・開新）

湯川愛梨（体育4年・済美）

「関東に勝つ」誓い精進

関西学生柔道体重別選手権大会／全日本学生柔道体重別団体優勝大会

柔道部男子は5月の関西学生優勝大会で8強に入り2019年以来の全日本学生優勝大会（6月）に進出。8月の関西学生体重別選手権で4位の9ポイントを獲得して、10月の全日本学生体重別団体優勝大会に進んだ。

男子 関西学生体重別選手権大会では60キロ級の山本英太（体育2年・新田）、66キロ級の廣田智大（体育4年・金光藤陰）、73キロ級の河野沢水（体育3年・常翔学園）が8強に進出。うち攻撃力に優れる廣田、組手が巧みな河野が全日本に進んだ。初戦でともに東海大学選手に敗れたが、貴重な経験を得た。

関西学生体重別は個人戦だが、獲得したポイントの合計で全日本学生体重別団体優勝大会の出場校が決まるため団体予選としての性格を持つ。「最低でもポイントを取れ」と送り出された選手は7階級中6階級で16強以上に与えられるポイントを獲得。生田秀和監督は「学生は奮起し、9ポイントは学生の大きな自信になった」と評価する。

ただ、全日本学生体重別団体優勝大会は帝京科学大学に0―3で敗れた。6月の全日本学生優勝大会でも2回戦で帝京大学に敗れており、対関東・東京勢は団体・個人戦で4戦全敗となった。

生田監督は日本女子代表コーチとしてパリ五輪に帯同した。日本代表の例えば、寝技で脚を絡められた状態から始める約束練習など個別の課題、テーマに絞った練習は参考になったという。

チームは久米井遥斗新主将（体育3年・高松商業）のもと切磋琢磨している。生田監督は「関東・東京に勝つ。今季果たせなかったこの目標を次年度に実現したい」と巻き返しを期している。

花崎凱阿（体育4年・英明）

廣田智大（体育4年・金光藤陰）

南濵竣太（体育4年・上宮）

永原月斗（体育4年・英明）

柔道部 中本、関西大会準優勝

関西学生柔道体重別選手権大会 全日本学生柔道体重別団体優勝大会

女子 中本は、関西学生体重別選手権では準々決勝で地力のある明治国際医療大学選手に対し寝技で技ありを取るなどして決勝に進んだ。全日本では、大会3位となる日本体育大学選手から技ありを取って先行したが、その後指導3つで逆転された。

また、関西学生体重別選手権では、階級を78キロ超級に上げた青木美保（体育4年・東大阪大学敬愛）が4強。57キロ級の森口志保（同・科学技術）も8強に入ってポイントを獲得し、全日本学生体重別団体優勝大会の出場権を獲得した。

青木美保（体育4年・東大阪大学敬愛）

森口志保（体育4年・科学技術）

柔道部女子は8月の関西学生体重別選手権大会で63キロ級の中本真奈美（体育3年・敬愛）が準優勝し全日本学生体重別選手権大会に進出。また、チームは10月の全日本学生体重別団体優勝大会も出場した。

中本真奈美（体育3年・敬愛）

その全日本学生体重別団体優勝大会では1回戦で、6月の全日本学生優勝大会1回戦で、0―3で敗れた帝京平成大学と対戦した。先鋒の増子和奏（体育2年・東大阪大学敬愛）が相手のエース格と価値ある引き分けに持ち込み、中堅戦で技ありを取られたが、副将の中本が一本勝ちで1―1として、大将戦に。1年生ながらセンスの良さを買われて起用された池田晴香（スポーツ科学・高川学園）が粘ったが、ラスト9秒でポイントを取られた。

2025年シーズンに向け、白樫希穂新主将（体育3年・箕島）のもと、部はさらなる精進をめざす。松田基子監督は「あと一息のところでの追い込みが重要。勝ち切るために稽古の質を上げたい」と飛躍をめざす。

辻野いづみ（体育4年・初芝橋本）

なぎなた部 河野、獅子奮迅 西日本で雪辱V

全日本学生なぎなた選手権大会／西日本学生なぎなた選手権大会

なぎなた部は8月の全日本インカレで団体の部1回戦敗退など振るわなかったが、11月の西日本学生選手権では、演技の部優勝、団体3位とリベンジ。大黒柱の4年生が抜ける来季は、新たなスタートとなる。

河野葵（体育4年・広島なぎさ）

6月の関西学生選手権は個人で河野葵（体育4年・広島なぎさ）が準優勝、演技で朴本新（体育2年・新潟青陵）・川口知咲季（同・和歌山北）チームが3位、団体も3位だった。

しかしインカレは、団体が1回戦敗退、演技の部は高溝遥風（体育2年・鯖江）・河野チームが2回戦、個人戦も河野選手が3回戦で敗れた。

11月の西日本学生選手権。引退試合となる河野は天川彰子監督と話し合い、チームの相手を昨年の関西学生選手権で優勝した川口に変えた。河野・川口チームは演技の部で優勝。有力大学が多く、インカレに近いレベルがある西日本学生でリベンジを果たした。河野は団体の部でも、代表戦で自ら2度勝って、チームを3位に押し上げた。

なぎなた部は2023年までチームを引っ張った阿部真優、そして24年の河野と大黒柱が2年続いて引退する。来季は4年生不在となり、3年生に期待がかかる。高溝新主将は「自分はチームを引っ張ると同時に、部員から気軽に相談してもらえる立場にもなりたい」と話している。

高溝遥風（体育2年・鯖江）

インカレ8強
B・Cからの選手昇格で活性化

関西学生サッカーリーグ 全日本大学サッカー選手権大会

サッカー部男子は、関西学生リーグで終盤に3連勝して4位。4大会ぶりに全日本インカレに進出し、決勝ラウンドを勝ち上がって準々決勝に進出した。

古山兼悟（体育4年・立正大学淞南）

男子　リーグ戦前期は6勝4敗1分け、勝ち点19で5位にとどまるなど苦しい展開が続いたが、残り3試合になって「真っ向勝負」（松尾元太監督）で臨んだ。DFライン、中盤、前線の各選手がハードワークを徹底し、3連勝。12勝8敗2分け勝ち点38で4位となり、インカレ出場を決めた。

インカレは、予選ラウンドで八戸学院大学（東北第1代表）に2―0で勝ち、決勝ラウンド・グループCに進んだ。初戦は九州産業大学（九州第1代表）に0―1で敗れたが、関東第2代表の強豪・筑波大学との2戦目では、攻守にアグレッシブさが増した。後半のPKで1年生GKの野村寛礼（藤枝明誠）がスーパーセーブ。DF池戸柊宇（京都橘）、FW臼田成那（ノースアジア大学明桜）との1年生トリオ（いずれもスポーツ科学）が活躍し、0―0で勝ち点1を獲得した。

3戦目の東海学園大学（東海第3代表）戦では前半18分に古山兼悟（体育4年・立正大学淞南）、後半29分は佐野竜眞（体育3年・瀬戸内）がゴールして2―0で勝ち、グループC2位で準々決勝に進んだ。

部は部員200人を超え、A～Dチームに分かれる。松尾監督は「今季はB、Cチームからの選手昇格が多く、新たな活力が生まれた」と振り返る。優秀な学生リーダーの存在も大きく、松尾監督がコーチ、学生リーダーとコミュニケーションを取り、毎日のように選手の昇格が決まる。山田隼輔（体育4年・市立尼崎）、山田和樹（同・立正大学淞南）、角矢翔和（同・熊本商業）、高橋大空（体育2年・星稜）らがB、Cチームから昇格した。

来季に向け、松尾監督は「新チームのメンバーも経験値もあり、魅力ある選手が多くいる。今季を超える結果を出してほしい」と期待している。

池戸柊宇（体育1年・京都橘）

木戸柊摩（体育4年・北海道コンサドーレ札幌U―18）

平瓜匠志（体育4年・賢明学院）

佐野竜眞（体育3年・瀬戸内）

関西リーグ3位も全国8強果たせず

サッカー部

関西学生女子サッカー秋季リーグ 全日本大学女子サッカー選手権大会

サッカー部女子は、関西学生女子秋季リーグは4勝1敗2分け、勝ち点14で3位。全日本インカレでは2回戦で早稲田大学に1―3で敗れた。

女子　サッカー部女子のチームカラーは「勢い」。前線からの守備で圧力をかけ、相手のミスを誘う。第1節は姫路獨協大学を4―0で圧倒。第2節は、春季リーグ優勝を果たした帝塚山学院大学に2―2で引き分けた。

リーグ戦中盤以降、しっかり守りながらも決定力不足が目立ち、明治国際医療大学に0―1で初黒星を喫した。しかし、6節の追手門学院大学戦はしっかり守り、清悠香（体育3年・鳴門渦潮）のゴールで1―0で勝利。最終節の武庫川女子大学戦も赤尾侑里（体育4年・東海大学付属福岡）が前半の終盤、コーナーキックからヘディングシュートを決め、1―0。2連勝でフィニッシュした。

インカレは、1回戦で清、橋本結菜（体育2年・大阪桐蔭）と辻原莉音（体育4年・帝京長岡）の2ゴールで、4―0で徳島文理大学に快勝。前年の2回戦で敗れた早稲田大学と対戦した。

前回は早大の力が強く、後ろに引いて守ったが、今回はディフェンスラインを押し上げ、前線からプレスをかけた。前半45分、1年生の西杏琳（スポーツ科学・追手門学院）が右サイドを上がり、ゴール前でこぼれた球を、これも1年生の矢野紗也佳（同・大阪桐蔭）が同点ゴールし、1―1で折り返す。後半も互角の展開で進んだが、個人技で2本のロングシュートを決められ、1―3で敗れ、8強進出は果たせなかった。

石居宜子監督は「自分たちの意図したサッカーができただけに、もったいない試合だった」と悔やむ。インカレ優勝は2006年度、準優勝は2014年度を最後に遠ざかっている。来季の上位進出に向けて必要なものとして、石居監督は「メンタル的なタフさ」を挙げている。

赤尾侑里（体育4年・東海大学付属福岡）

長谷原彩音（体育4年・鳴門渦潮）

矢野紗也佳（スポーツ科学1年・大阪桐蔭）
川浪実歩（体育3年・神村学園高等部）

相谷亜由花（体育2年・大阪桐蔭）

単独公演盛況

ダンス部

ダンス部の第49回単独公演「おいしいを感じる身体」が11月、大阪府高石市のアプラホールで開催された。会場の45席を埋めた観衆は、バリエーションに富んだ美味な14作品を堪能した。

「おいしいを感じる身体」は体育学部3年生の加藤想大さん（興國）、荒智太郎さん（芦屋学園）、田中結さん（樟蔭）が創作した。部が1年を通してテーマにしてきた「経験」を味わうことに焦点を当てた作品だ。メッセージは「息詰まり涙の味がした日もある。喜びに酔いしれた日もある。どんな出来事もガブッと噛み締め、味わえる身体であれ」。3人をはじめ11人が全身で表現した。

8月の全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸で神戸市長賞を受賞した「偶然か、運命か～人生双六（すごろく）の遊び方～」も上演された。日本の遊びの文化に、誕生・入学式・コロナ禍など多様な人生模様と盤上のマスをリンクさせ、人生ゲームのように楽しめる作品だ。

また、サッカー部男子と3年連続でコラボし、約20人が昨年以上に本格的に演技した。新体操部4人も昨年に続いて演技した。

白井教授は「単独公演では3つの新作を発表した。夏のフェスティバル神戸で新境地を切り開く作品として評価されたことで、新しいことをやってみたいという学生の意欲が、ポジティブに単独公演にも継続されたと思う」と学生の挑戦心を評価している。

偶然か、運命か～人生双六の遊び方～　©小西祥平

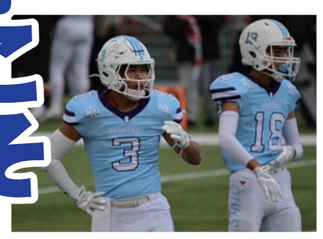
おいしいを感じる身体　©小西祥平

©小西祥平

来季こそ逆襲を

アメリカンフットボール部

関西学生アメリカンフットボールリーグ



アメリカンフットボール部は関西学生リーグ2部で奮闘したが、1勝6敗で7位。入替戦で敗れて3部降格が決まり、次年度に逆襲を期す。

2022年に3部で優勝。入替戦で勝って、23年は2部に昇格し、5位だった。今季はスローガンに「QUEST」（勝利の追求）を掲げた。春の試合では前年敗れた相手に雪辱する場面もあり、手応えはあった。ランがよく決まり、要所でパスを通す試合運びで、リーグ4位以内をめざした。

しかし、9月の大阪公立大学との開幕戦では、オフェンス、ディフェンスとも後手に回り、0―36と大差がついた。以後も同志社大学、甲南大学、龍谷大学に敗れるなど連敗が続く。大体大を含む3大学が1勝6敗で並び、抽選で7位となって、大阪教育大学と入替戦で対戦した。

第4クオーターが終わり、10―10でイブレークへ。先攻の大体大はフィールドゴールで3点を加え、大教大に逆転タッチダウンを決められ、13―16で敗れた。しかし、瀧野皓太主将（体育4年・向陽）は「痛恨の敗戦だが、気持ちのこもった試合はできた。1対1でも決して負けなかったと思う」と敗戦にも次につながる光明を感じた。

主力にけがが相次いだ中で、主に2年生が台頭してきたことも明るい材料だ。瀧野は新主将の西山黎（体育3年・大阪産業大学附属）らに「主将、主務、ポジションリーダーがチームの方向性をしっかり決め、2部復帰を果たしてほしい」と期待している。

セーリング全日本3連覇

冨部柚三子さんと指導教官の土屋裕睦教授

セーリング・ILCA級の全日本選手権で、本学大学院博士前期課程2年の冨部柚三子（とんべ・ゆみこ）さん（34）＝福井総合病院＝がILCA6／7級で大会3連覇を果たした。冨部さんは2024年、目標だったパリ五輪出場は果たせなかったが、9～10月の国民スポーツ大会でも優勝した。

冨部さんは東京都出身。加山雄三ファンだった父の影響で小学4年からヨット教室に通い、高校から国体に出場した。日本女子大学卒業後も競技を続け、2022年アジア大会に出場。スペインのグラン・カナリア島や神奈川県の江ノ島を拠点に活動した。

一方、2020年から大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科博士前期課程に在籍。オンライン講義と長期履修制度を活用し、土屋裕睦教授の研究室に所属してスポーツ心理学を研究している。五輪予選が本格化した2023年の後期に休学し、24年の後期から復学し、春の修了をめざす。修士論文の題目は「セーリングの競技女性トップアスリートのピークパフォーマンスに関するインタビュー調査」（仮題）。

今後については未定だが、冨部さんは「12年間五輪をめざし、セーリングには20年以上関わった。競技の発展にこれまでの経験や知識を活かしていきたい」と話している。

堂々の3年ぶり準V

ハンドボール部 男子

走り切るハンド徹底

全日本学生ハンドボール選手権大会／日本ハンドボール選手権大会

日本選手権の試合後、大阪体育大学と豊田合成の選手が記念撮影

誇れる準優勝だ。ハンドボール部男子は全日本インカレで、小柄な選手が走り切るスピーディーなハンドボールを展開した。実力校を連破して決勝に進出。最後は中央大学に35－37で敗れたが、堂々の3年ぶり準優勝となった。

関西学生秋季リーグで、春に5連覇を阻まれた関西学院大学に勝ち、全勝でV84を達成。その勢いでインカレ会場の広島県立総合体育館に乗り込んだ。

準々決勝で日本体育大学と44－43の激闘。準決勝は雪辱に燃える関西学院大学を38－36の僅差で降した。

決勝。ハンドボール部男子にとって、中央大学は長年、立ちはだかる高い壁だ。2019年は準々決勝で25－29、2020年のコロナ禍による中止をはさみ、2021年は決勝で28－32、2022年は準々決勝で31－34、23年は準決勝で32－33。2018年のV10以降はすべての大会で中央大学に敗れた。登録メンバー中190㌢台を3人、180㌢台を14人擁する大型チームの中央大学に対し、本学は、180㌢台が4人だけだ。

それでも、160㌢台の8人を含め、小柄な選手がスピーディーに走って対抗。173㌢の荒瀬廉（体育4年・神戸国際大学附属）が10得点、168㌢の下川陽向（体育3年・大阪体育大学浪商）が7得点を挙げた。後半10分、6点差を追いついていったんは23－23としたが、そこから5連続失点を喫して差を広げられた。

表彰式では、荒瀬、田代優樹（体育4年・同）に優秀選手賞、橘光太郎（体育2年・同）に特別賞が送られた。

チームは、12月の日本選手権でも走り切るハンドボールに徹した。1回戦は、福岡大学に43－32で勝ち、2回戦で大会4連覇中の豊田合成とぶつかった。

試合は荒瀬が先制シュートを決めるなど攻撃の軸になり、前半の出だしは3－4と競り合ったが、相手の圧倒的な攻撃力で大差をつけられ、荒瀬が6点、前川大樹（体育4年・瓊浦）が5点を挙げたが、29－56で敗れた。

下川真良監督は「一生懸命走ったし、日本一のチーム相手に攻撃回数も80回近くあった。小柄なチームが勝負してインカレも準優勝し、学生をほめたい」と選手を讃える。主将の荒瀬も（豊田合成に準々決勝で敗れた）昨年と違って思い切りプレーできた。フェイントで相手をかわしてシュートし、パスを回して味方のシュートまで行かせることができた」と敗戦にも手応えを感じた。

荒瀬はその後、A代表の強化合宿に招集され、世界選手権に出場した。

チームはインカレ、日本選手権で得た手応えと課題を胸に、来季、6大会ぶりのインカレ優勝をめざす。

橘光太郎（体育2年・大阪体育大学浪商）

下川陽向（体育3年・大阪体育大学浪商）

田代優樹（体育4年・大阪体育大学浪商）

竹下颯斗（体育2年・大阪体育大学浪商）

荒瀬廉（体育4年・神戸国際大学附属）

北谷、2連覇狙う

2025年11月に東京で開催される「第25回夏季デフリンピック」で、北谷宏人（教育4年・大塚）が陸上男子棒高跳び2連覇をめざしている。

デフリンピック

北谷は高校3年だった2020年に日本デフ陸上競技選手権大会の棒高跳びで優勝した。2022年デフリンピックブラジル大会棒高跳びで4㍍20をマークし金メダル。2024年7月、世界デフ陸上競技選手権大会（台湾）では4㍍50で銀メダルを獲得した。卒業後は東京都内の会社に就職して競技を続け、東京デフリンピックをめざす。

北谷は「東京大会をきっかけにデフリンピックの知名度がもっと上がるように、しっかり勝ち切って2連覇を果たしたい」と意気込んでいる。

陸上競技部

PRIDE OF OUHS

パラリンピック

水上競技部

アダプテッド・スポーツ部

パリ2024パラリンピック競技大会が8月28日から9月8日まで開催され、本学から水上競技部女子の宇津木美都（教育4年・京都文教）、アダプテッド・スポーツ部の内田峻介（同・山口南総合支援）の2人が出場。日の丸を背負い、世界のトップ選手と渡り合った。

2大会連続出場の宇津木は、女子100㍍平泳ぎ（SB8）決勝で、1分26秒42をマークし、5位入賞。東京大会から順位を一つ上げ、タイムも2秒17縮めた。予選は全体の8位で、決勝も前半は最下位でターンしたが、そこから粘って追い上げた。「予選は直前のけがもあり思うように泳げなかったが、決勝は2秒タイムを上げ、東京よりも順位を上げた。しっかり全力を出し切れた」と振り返る。

初出場の内田は、ボッチャ個人BC4の1次リーグで1勝2敗。2022年世界選手権を制し次代を担うホープが、世界のレジェンドに屈し、予選敗退となった。「まだまだ実力不足。自分のパフォーマンスを発揮できなかった」と悔やむ。

それでもボッチャ日本代表「火ノ玉JAPAN」の主将として、チームを鼓舞し、チーム戦で銅メダルを獲得。主将として「日本はボッチャで2つの銅メダルを含む過去最多の5つの入賞を果たせた。パリのメンバーで戦い抜けたことをとてもうれしく思う」と誇らしげに語った。

おかえりなさい

壮行会での宇津木、内田選手